屏風　金彩象嵌　浮き彫り　琳派「紅白梅と椿と牡丹」 フレーム：本漆　2010
H142×W270×D3cm

琳派・光琳

日本の風土や花鳥風月を繊細かつ豪華絢爛に
表わした「琳派」の世界をガラスアートに再現。
黒木国昭の代名詞とも言われるシリーズ。
金・プラチナ箔の多用や丹念な象嵌が特徴的。

行燈　琳派「四季の調べ」 2002　H108×W41×D41cm

屏風　琳派「明月に雉・秋草図」 フレーム：本漆　2013
H142×W180×D2.6cm

新世紀ロマン　花器「カトレア」 2012　H52.5×W23×D21cm

新世紀ロマン

十九世紀末、全盛を迎えたアール・ヌーヴォーに
ジャポニズムの原点「自然美あふれる情緒豊かな感性」
を加えて創造された、現代のアール・ヌーヴォー。
華麗なる世界。

新世紀ロマン　ランプ「胡蝶蘭」 2005
H49.3×W31.6×D31.6cm

新世紀ロマン　花器「夕顔」 2005
H35×W26×D26cm

新世紀ロマン　飾壷　～天平の舞～「鳳凰」 2012
H42.6×W27.1×D27.1cm

伝説の不死鳥に込める祈り

第一部　先達に学び自己を磨く――ガラスと歩んだ五十年

東海道五拾三次　花器「蒲原」 2002
H52.5×W35×D21cm

ガラスの聖地を圧倒した〝ガラス工芸作家・黒木国昭〟

二〇〇八年の暮れから二〇〇九年の一月にかけて、イタリア・ヴェネチアの国立博物館で二ヵ月間、大型の展覧会「琳派と広重　東海道五拾三次の展開」を開催しました。圧倒的な評価を得たのは、二十年間取り組んできた歌川広重の東海道五拾三次シリーズや、四十八年間やってきた琳派の世界でした。

ガラス工芸でヴェネチアが一番の聖地と言われながらも、今日本で私がやっている仕事は、その世界をはるかに超えているのではないかと思います。西洋と東洋とで、なぜこれだけの差が出たのか。それは、私が「ものを作れる作家」という強みにあると思います。でき上がった作品を観てもらうのみでなく、イタリアのムラーノ島の工房でヴェネチア中のマイストル（親方）を集めて、彼らや新聞社をはじめ、マスコミ各社の目の前で実際に制作しました。いつも使っている自分の工房ではなく、現地の工房で、しかも現地の道具を使っての制作です。これ

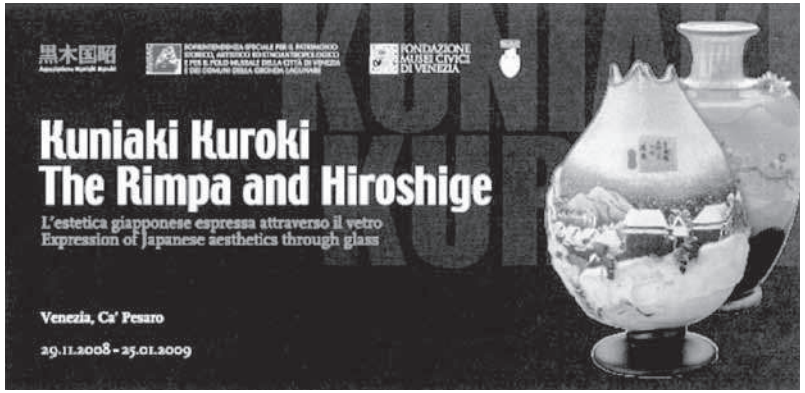
で彼らをあっと言わせました。

ヴェネチアは、吹きのガラスを主導にして千年近い歴史を積み上げてきています。ですから歴史の長さから言えば、私たちの及ばぬ素晴らしい歴史を持っています。しかし手法や考え方というのは、やはり一本なのです。

私の場合は日本人として、日本独特の古来からの手法、いわゆる蒔絵（まきえ）や象嵌（ぞうがん）を取り入れながら、ヴェネチアの吹きガラスをさらに高める形で複合的な仕事に取り組んできました。ですからすでに私の歴史には五通り、六通り、七通りと大きな柱があるのです。これが世界をリードする仕事につながりました。

「ガラス」という西洋の素材を使いながらも、日本人としての感性や、自分の生まれたふるさとというものを大事にしつつ仕事をしてきましたので、その積み重ねが大きな成果となったということだと思います。

ガラスと出合い向き合ってきた五十年は、常に自分を見つめ、足りない部分を高めていくことの連続でした。



イタリア・ヴェネチアで開催された「琳派と広重 東海道五拾三次の展開」のポスター（上）とオープニングの時の模様（下）（2008年11月28日～2009年1月25日）
「イタリアの文化であるガラスがヴェネチアに里帰りするのは、マルコ・ポーロ以来である」と絶賛された

ハングリー精神を養った少年時代

私は宮崎県須木村（現小林市）に昭和二十年、第二次世界大戦終戦の年に生まれました。私の育った環境は、被害を受けた終戦直後の状況のままで、まして田舎ですので、その痕跡がまだ色濃く残っていました。とにかく貧しい生活のなかで育ったということが一番にあります。家族が食べていくのが精一杯という環境です。当時家には乳牛が一頭おりました。その乳牛を育てて、朝、搾乳するのです。それが唯一の、家の現金収入でした。

毎朝お袋と四時頃に起きます。そして牛の乳を搾って殺菌し、布巾でこして、じょうごで瓶に分けていく。昔はちゃんとした牛乳瓶はないので、酒瓶などをきれいに洗って、お客さんの希望によって一合瓶、二合瓶と使いわけて瓶詰めをしていきます。

そしてその牛乳を配達するのが、当時小学校五年生の私の仕事でした。買ってもらった頑丈で大きな自転車の荷台に牛乳瓶の入った重い箱を二段に重ねて乗せ、お客さんの家々に配達をしながら学校に通っていました。

その頃の私はまだ身体も小さくて、大きな自転車のサドルに腰掛けると足が届かないのです。仕方なくサドルには腰掛けず、自転車の骨組みの三角のところに足を突っ込んでこいでいました。これは非常にバランスが難しい。牛乳をたくさん積み込んでいますから、なおさらです。そして配達に使った箱をその自転車に積んだまま学校の自転車置き場に突っ込み、授業を受ける、それが私の日課でした。「どうしてあんなに大きな荷物を積んで学校に来るんだろう」という周りの目も気になりましたが、仕事ですから仕方がありません。学校が終わると、今度はお客さんのところから空瓶を回収して帰り、熱湯で瓶の殺菌をして次の日の段取りをしました。子供と言えどもあらゆる仕事が連続でありました。

今振り返ると「大変だった」という思いはありますが、当時はただただ夢中で、そういう生活が当たり前でした。そういうなかで、自分たち六人兄弟――兄二人、姉二人、弟一人、そして私が、どのような役割を持ってやっていくか、それぞれ

が自分の立ち位置というものを明確に理解していました。やはり五番目である私は、早く家から出て食いぶちを減らさなくてはならない、ということがいつも頭にありました。ですから、たとえば進学ということにしても、一番上の姉は高校に行ったのですが、家の貧しさを知る次女は、「就職する」という形で家を出ました。そのずっと下である私が高校に通うためには、やはり自分で、今で言うアルバイトをして学費やバスの定期代などの費用をまかなうしかありませんでした。いろいろな仕事を大人よりも若干低い賃金で引き受け、土曜日、日曜日はとくに多く働きました。そういう、家族における順送りの順番というものがあったなかで、私は高校を卒業させてもらえたのです。

大人に混じってのアルバイトは、たとえば山の木を伐採(ばっさい)した後に杉の木を植える植栽(しょくさい)の仕事など、大変な重労働でした。高校生といっても一、二年生の頃は私は身体も小さく負担も大きかったのです。しかし我が家はそんなことは言ってはいられない状況でした。終戦後の日本の状況からすれば、私だけがとくに恵まれない環境で育ったわけではないのですが、やはり裕福な友人を見ると羨ましく思ったものです。

ある友人は資産家でした。山を持っていてたくさんの人夫を雇っていました。さらに父親を戦争で亡くされていたので、国から遺族年金を受けていました。同級生のなかで一番親しく遊んできた仲間であるけれども、やはりどこか心に引っ掛かるものがありました。

子供としては家での生活は、経済的だけでなく、精神的にも苦しい状況でした。高校から帰り、さらにアルバイトから帰ってくると、家の黒板にはその日の家での仕事が書いてあるのです。「今は、どこどこに行っているから帰ったらすぐ手伝いに来い」というように。貧乏している状況からして家の仕事の手伝いは当たり前のことと受け止めてはいましたが、遊びたい盛りでもあり、またあまりにもその親友との差が大きかったので、すねるところまではいきませんでしたが、そうとうな辛抱が必要でした。私のハングリー精神は、「いつの日か見ておれよ」という、この時の過程で生まれてきたのは間違いないと思います。

私には、高校を出た後はとにかく真っ直ぐ就職して、少しでも多く稼いで現金

を家に送るのだという使命感がありました。ですからそういう貧しい生活のなかでも不満ということは一切なく、「高校を出してもらった」という感謝の思いだけがありました。

そして集団就職列車で東京に出てきたわけです。

ガラスとの強烈な出合い

ガラスとの縁は、たった一枚の会社案内のパンフレットでした。高校の進路指導室に集団就職のたくさんのパンフレットがありました。そのなかで非常に綺麗なパンフレットが目にとまりました。進路指導の先生がたまたま美術の先生だったこともあり、あれこれ相談するなかで決めたのがガラスの工場「山谷硝子（やまやがらす）」でした。その時、その会社に私以外に二人が入ることになったのです。「三人も行くなら頼もしいな、じゃあ頑張ろうや」と一緒に小林を出たのですが、一週間も経たないうちに、そのうちの一人は夜逃げしていなくなってしまいました。

ガラスのイメージから綺麗なことばかりを連想していたのでしょう。現実が思っていたより厳しかったので、続かなかったのだと思います。一方私には「ガラスを一生のものとする」と確信した瞬間があり、始めからこの仕事を続けていくのだという強い思いがありました。

入社のために上京した日、会社の総務の方が東京駅に私たちを迎えに来てくださいました。会社に到着し、社内を案内してくれたその時、捨てるために積んであったカレットというガラス屑（くず）の山が、夕日に照らされて輝いているのを見たのです。私にはそれがステンドグラス以上に、いや宝石以上に美しく見えました。「ガラスってこんなに綺麗なものなのか」――。強い感動を覚えました。時間もはっきりと覚えています。昭和三十八年、三月十三日の二時五十九分という時間です。この時間が私がガラスという素材に感動した瞬間です。この時の深い感動は、「これだったらやっていける」という思いにつながりました。ですから、なんとしても早く仕事を身に付けなければならないという思いを湧き起こさせたのです。

会社に入って実際に仕事が始まると、やはり徒弟（とてい）制度のたいへん厳しい職場で、